

# 図書館だより



No. 5

平成30年9月7日

「平成最後の夏」という言葉が話題となり、あちこちで耳にした今年の夏。今まで経験したことのないような暑い暑い夏でしたが、みなさんにはどんな思い出ができましたか。2年生は修学旅行での様々な体験を通し、たくさんの思い出もできたことでしょう。楽しかったこと、興味深かったことなど、おみやげ話をぜひ聞かせてほしいです。

さて、来週はいよいよ桔梗祭です。連日、準備に忙しそうですが、充実した表情で頑張っているみなさんを見てると、今年の桔梗祭も楽しみだなと期待が膨らみます。模擬店も各団体の発表もそれぞれ楽しみにしています。今年はどんなデザインのTシャツが披露されるのか、クラスTシャツにも注目しています。まだまだ残暑の厳しい日が続きますが、体調に気をつけながら、力を合せて、平成最後の桔梗祭を盛り上げていきましょう。



## \*思い出をアルバムに刻む\*

### 744-ス『スクラップブック』 勝呂 正子 || 著 玄光社

手軽に写真を撮り、加工を楽しめる時代になりました。ただ、データとして保存しておけるようになってからは、現像することがめっきり減ってしまいました。スマートフォンやタブレットに保存した思い出の写真を眺めるのも楽しいですが、現像した写真をアルバムに綴じていくのもいいものです。台紙の材質や色を選んだり、どういうデコレーションが写真に似合うか試したり、構成を考えたりという工程も楽しみながらアルバムを作ってみませんか。この夏や修学旅行での大切な思い出がますます特別なものに思えてくることでしょう。友だちにプレゼントして思い出を共有するのもいいですね。

## \*まだまだ冷たいものおいしい\*

### 596.6-ワ『パッドや保存袋で作れるアイスクリーム&アイスクーキ』 若山 曜子 || 著 マイナビ

あまりの暑さに、「とにかく少しでも涼しくなりたい！」と、今年の夏はみなさん、アイスに手を伸ばすことがいつもに比べ多かったのではないのでしょうか。少しずつ暑さは和らいできましたが、まだまだ冷たいものおいしい、でも市販のものはもう食べ飽きた、という人におすすめしたいのがこのレシピ本。練乳いちご、クリームチーズオレンジチョコレート、塩ナッツキャラメルなど、思わずため息が出てしまうほど、おいしそうなアイスの作り方が載っています。どれも本格的に見えますが、簡単に作れるよう工夫されたレシピなので、手作りに自信がない人でも安心して挑戦できます。

## おはなし会やります@桔梗祭

★9月15日(土) 11:00~12:00 桔梗ホール

★9月16日(日) 11:45~12:45 図書館となりメディア室

朗読乙女と飛び出そう！をテーマに作品を集めました。お楽しみに。



## この秋 読みたい気になる本

### 913.6-モ『ペンギン・ハイウェイ』 森見 登美彦 || 著 角川書店

「ぼくはたいへん頭が良く、しかも努力をおこたらずに勉強するのである」と、冒頭から読者にインパクトを与える自己紹介を放つ主人公のアオヤマくん。小学4年生にして、大変勤勉な彼は日々たくさんの研究に忙しい。そんなアオヤマくんの暮らす街に、突如、どこからともなくペンギンが現れた！さっそくこのペンギンの出所を調査を始めた彼は、身近にいる意外な人物がこの謎を解く鍵を握っていることを掴む。小さな少年アオヤマくんのたくさんの不思議と、ちょっぴり切ない恋心が交差した大冒険ストーリー。森見登美彦ワールドはもちろん今回も健在です。

### 930.2-ミ『クマのプーさん 世界一有名なティディ・ベアのおはなし』 シャーリー・ハリソン || 著 河出書房新社

今や世界的有名なキャラクターとなったクマのプーさん。この秋、実写映画化もされ、注目を浴びています。さて、このプーさんですが、ディズニーのキャラクターとして生まれたのではなく、元のモデルはイギリスで生まれた1匹のティディ・ベアだったということをみなさんにご存知でしょうか。

プーさんがいつどこで、どのようにして生まれたのか。その後、どのようにしてクリストファー・ロビン(彼も実在しています)と出会ったのか。なぜプーという名前がついたのかなど、プーさんが今に至るまでの歴史が詳しく書かれた本です。プーさんにまつわる秘話がこんなにあるとは驚きです。

## 図書館司書の「今月はこの本を読みました」

島本理生さんの著書『ファースト・ラヴ』が7月に第159回直木三十五賞を受賞しました。島本さんの作品をほとんど読んできている私にも嬉しいニュースでした。このおめでたい機会に初期の作品も読み返してみようと、『一千一秒の日々』(913.6-シ 島本 理生 || 著 マガジンハウス)を読みました。テーマは、ずばり恋！連作短編集になっていて、短編でありながら1つの物語のようにも感じられます。島本さん自身もあとがきで「じれっとなるほどスローペースな物語ばかり」と書いていましたが、主人公たちの抱える恋愛事情はどれも不器用でもどかしくなるものです。失恋したり、新たな恋に出会ったり、今のお相手に手こずったり、色々な恋の形が描かれていますが、不思議なものでどの話にも「その気持ちわかるな～」と思うところがあって、どの主人公にも「幸せになって！」とエールを送りながら読みました。今の島本さんと芯の部分は変わっていないけれど、若さや初々しさがくっきりと作品に現れていて、くすぐったくもありました。

## そうだ、先生と本のことを熱く語ろう!! ～関口先生編～

司書(以下 司):関口先生の1番好きな作家さんということで加藤千恵さんの『いびつな夜に』を読みました。彼女は歌人でもあるんですね。物語に添えた短歌にも恋する女子の心がよく表されていておもしろかったです。

関口先生(以下 関):加藤千恵さんは大学の生協でたまたま手に取ったのが始まりでした。彼女の書くものには非日常的なものがあまりなくて、他の作家さんと比べてもひと際うまく日常を描いているところがヒットしました。気持ちの機微に新しい気づきを与えてくれる作家さんですね。

司:今日はたくさん本を持参してくださいましたが、村山由佳さんの本も目立ちますね。村山さんといえば、『おいしいコーヒーのいれ方』のイメージが強いです。

関:あれは全巻持っています。優柔不断で、なよなよしている主人公の勝利くんの行動が、現実離れしていないところがいいんですね。『星々の舟』はすごく重いんですけど、家族の形をいろんな風に切り出しているいいなと思います。『遙かなる水の音』はある青年の遺言をかなえるために、彼にまつわる人たちが遺灰を持って旅をするんですけど、旅先でいろんな感情や人間模様が見えてくるんです。セクシャルマイノリティにも触れていて、これも少し重めの作品ではありますが、好きな作品です。あと、唯川恵さんの『「さよなら」が知ってるたくさんしたこと』もすごくおすすめです。

司:村山由佳さんと並ぶのは唯川恵さんって感じがありますよね!

関:わかります(笑)これはエッセイで、タイトルだけ読んでも『ひとりの時間をどう過ごしてますか』、『今の生活、そんなに不満ですか』って気になるものが多いし、唯川さんの世界をよく表したような本ですね。

司:作家さんが好きになると、エッセイも読みたくなりますよね。

関:なりますね。あまり本を読まない人にもおすすめしたいのは、『うれしい悲鳴をあげてくれ』という本です。「10ページ読めばおもしろさがわかります」というふれこみに惹かれて、立ち読みして、気に入って買いました。この出会いも生協です。

司:生協すごいんですね(笑)!!これもエッセイですか。

関:エッセイも小説も両方入っています。短編なので移動中でも読みやすいし、おすすめです。

作家で選んでもいるんですけど、おもしろそうだなと気になったらまず読んでみえています。

司:関口先生が今日持ってきた『試着室で思い出したら本気の恋だと思ふ』は図書館にもあるんですけど、これは私がもろ書名に惹かれて選んでしまった本です。こんな書名見たら、気になりませんか。

関:気になりますね(笑)これもおもしろかったの、読んでほしいと思う本ですね。1つのアパレルショップをターミナルポイントにして、いろんな人が服に対する思いだとか、そこに付随した出来事を綴ったような形の話ですね。ちょっと大人びているので、今の高校生が読んですぐに「おおー!」とならないかもしれませんが、社会人になってから読んでみると、わかる気持ちがたくさんあるんじゃないかなと思いますね。

司:あとは、石田衣良さんですね。『北斗』は関口先生がおすすめしてくださったのをきっかけに読みましたが、石田さんの作品の中でも断トツによかったです。

B913.6-カ 『いびつな夜に』  
加藤 千恵 || 著 幻冬舎

913.6-ム 『遙かなる水の音』  
村山 由佳 || 著 集英社  
B914.6-ユ 『「さよなら」が知  
ってるたくさんのこと』  
唯川 恵 || 著 新潮社

B913.6-イ 『うれしい悲鳴をあげてくれ』  
いしわたり 淳治 || 著 筑摩書房

関:これは絶対におすすめですね。

司:このサブタイトルがちょっと怖いじゃないですか。それでどんな話だろうと読んでみたら、先が気になって、一気に読みました。

関:読み切るまで止まりませんよね。主人公の心の動きだけでなく、周りの人の心の動きにもすごく考えさせられる本ですね。『北斗』はさっきの本とは逆に、高校生のうちに一度読んでほしいな。

司:この『五年三組リョウタ組』もおもしろいですね。

関:爽やかさがあっていいですね。クラス内で色々問題は起こるけど、読後感よく本が閉じられますね。サクサク読みつつ、世相を表されていて考えさせられたのは『池袋ウエストゲートパーク』シリーズですね。あとはこの『てのひらの迷路』もいいです。

司:これは読んだことがない作品ですが、どんな話ですか。

関:どんな風にその作品が生まれたのかっていうのが前置きとしてすべてに書いてある、というおもしろい構成のショートショートです。

司:これすごくおもしろそうですね!貸してもらってもいいですか。

関:ぜひ!!ほかに、窪美澄さんの本も読んでいます。『水やりはいつも深夜だけ』はブログで偽った自分を作っている主婦の話とか、義理の両親との関係に悩む話とか、息苦しい世界の中で生きている人たちを描いた短編集ですね。

司:おお!私も窪さん好きで、よく読んでいたので、おすすめに挙げてもらえて嬉しいです。

関:今悩んでいる人がいれば、この主人公たちの話を読んで、何か救われるところがあるといいなと思います。

司:ここまで話を聞いていて思いましたが、関口先生が読むものからは“優しさ”が感じられますね。

関:“劇的”というよりはやっぱり“日常”に近いものが好きなんですよ。鮮烈なものを題材にしているよりも何か生きにくさを感じている人たちの風景だとかを切り取った作品というのが1番おもしろいかな。

司:じゃあ、ファンタジーはあまり読まれませんか。

関:ああ、ハリーポッターとかは読みましたし、おもしろかったですけど、ファンタジー作品を読んでもその後にはやっぱりいつもの日常を描いた本に戻ってきますね。今も何冊か買って読み途中なものがありますし。

司:それも聞きたかったんです。今読んでいるのは、どんな本ですか。

関:窪美澄さんの『雨のなまえ』です。どこか出かけると、そのついでに本屋さんは立ち寄っています。やっぱりとにかく“場面が動く”より“感情が動く”のが好きですね。そこが一番根底にあって、それが日常に密着していればしているほど、おもしろいです。表面的にはさざなみのように見えても、その下で大きな感情のうねりが起こっているという方が物語としておもしろいと、そういう気持ちで選んで読んでいます。

司:じゃあ、本を読んで感情が揺れて、泣いたりってこともありますか。

関:ツーンと涙が流れる程度ですけど、その気持ちにシンクロする瞬間が本の醍醐味でもありますよね。

司:自分と重なるところが多いほど、深く物語に入り込めますしね。

関:一番は読み終わった後にため息がつける作品を読みたくって思いますね。「この本を閉じたくない」って感情ってすごく大事ですね。

司:ものすごくわかります。その気持ちを共有できて、今日は嬉しかったです。ありがとうございました。

B913.6-イ 『北斗 ある殺人者の回心』  
石田 衣良 || 著 集英社

B913.6-イ 『てのひらの迷路』  
石田 衣良 || 著 講談社

913.6-ク 『水やりはいつも深夜だけ』  
窪 美澄 || 著 角川書店